



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 山形市方言の補助動詞の自立度  |
| Author(s)    | 渋谷, 勝己  |
| Citation     | 阪大日本語研究. 2025, 37, p. 1-17  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/101118">https://doi.org/10.18910/101118</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 山形市方言の補助動詞の自立度

The degree of independence of auxiliary verbs in Yamagata Dialect

渋谷 勝己  
SHIBUYA, Katsumi

キーワード：山形市方言、補助動詞、自立度、文法化

### 要旨

本稿では、山形市方言の動詞テ形に後接する補助動詞について、標準語などと対照しつつ、音融合・アクセント・助詞の介在・脱範疇化などを基準とする形態統語面、及び、各補助動詞の担う用法の面からその自立度を分析した。その結果、当該方言の「動詞テ形+補助動詞」形は、①「動詞テ形+イル」の場合を除き、音融合がない、複数のアクセント単位をとることがある、助詞の介在可能度が高い、単独の動詞として持っていた特徴を補助動詞化しても維持している部分がある、などの点で形態統語的に補助動詞の自立度が高いこと、②用法面でも標準語や東京方言のそれよりも狭く、文法化が進んでいないこと、などを確認した。

### 1. はじめに

標準語<sup>1)</sup>を含め、日本語の多くの方言は、「書きはじめる、書きおわる、書きだす、書ききる、書きつくす」などの〔動詞連用形+動詞〕や、「書いている、書いてある、書いておく、書いてみる」などの〔動詞テ形+動詞〕のように、動詞が連鎖した形で、後の動詞が文法的な意味を表す表現形式を持っていることが多い。しかし、この形式には地域による違いもある。たとえば〔動詞連用形+動詞〕については、山形市方言などの一部の方言ではほとんど使用されず（渋谷 2021）、仮に方言会話において使用される場合には標準語的なニュアンスが強く出るのに対して、九州北部や沖縄などの方言においては、〔動詞連用形+きる〕や〔動詞連用形+おおせる〕の形が文法化を進め、能力可能を表すようになっている。一方、〔動詞テ形+動詞〕については、基本的には全国の方言で広く用いられているようであるが、地域によっては以下のような特徴を見せることがある：①（マス形を除く）「動詞テ形+オル」のように、その使用地域が限られる形式がある、②「動詞連用形+ヨル」と「動詞テ形+オル」のように、アスペクトというひとつの中法カテゴリにおいて対立する場合がある、③その用法についても、沖（1996）や高田（1999）が記述した京阪方言の「動詞テ形+オク」のように、地域によって違いがある場合がある。これに加えて山形市方言などでは、④〔動詞テ形+動詞〕のうちの後項動詞（以下「補助動詞」

とする）の自立度に他の方言との違いがあり、当該方言においては、「イル」を除けばその自立度が比較的高い=文法化が進んでいないようである。

本稿では、動詞の連鎖した形に見られる上のような地域差のうち、山形市方言の〔動詞テ形+補助動詞〕の補助動詞部に焦点を当て、標準語のそれと対照しつつ、一部東京方言や大阪方言も参照して、その自立度の高さを確認する。方言の形態統語面に観察される特徴を社会言語類型論的に把握する試み（渋谷 2021、2022）の一環である。ただし、以下の分析は、現段階ではまだ当該方言の個々の補助動詞についての記述を踏まえて行うものではない。個々の補助動詞の記述は今後の課題とし、本稿ではその自立度の高さをごくおおまかに確認すること目的とする。

以下、2節では補助動詞のうちやや個別的な振る舞いをする「イル」の特徴を整理する。続いて、3節で個々の補助動詞の形態統語面に見られる自立度の高さを、4節で用法面に観察される自立度の高さ（文法化の進行の遅れ）を確認する。

なお、以下にあげる山形市方言の用例はすべて筆者（1959年生。18歳まで山形市居住）の内省により、〔動詞テ形+補助動詞〕部（と一部その後接形式）のみを漢字カタカナ混じりで記し、その部分に対応する標準語形を漢字ひらがな混じりで括弧に入れて示す。用例のその他の部分は、読みやすさのために標準語で記す。また、以下の本稿の観察によれば、少なくとも山形市方言については、「テオク」「テミル」などと一体化して記すことには違和感があるということになるが、当該方言の各補助動詞に言及する場合には便宜的に「テミル」「テシマウ」のように記することにする。

## 2. テイル

分析に入る前に、自立度という点で他の補助動詞と性格を異にするテイルについて簡単に述べておく。標準語の「ている」が他の補助動詞と性格を異にすることは岸本（2021）などに指摘があるが、山形市方言の補助動詞テイル・ティタ（方言形はテル、テダ）も、他の補助動詞とは性格が異なるところがある。このことは、形式の自立度という点では対極的な、次の点に伺うことができる。

(a) 音の融合。山形市方言のティタについては、形態面で標準語よりもさらに音の融合が進んでいるところがある。具体的には、標準語で促音便形をとる四段動詞（山形市方言では才段の未然形を欠くため）、及び、一段動詞、力変動詞、サ変動詞について、標準語形を基底形としたとき、それに形態音韻規則が適用されて、ッタ／ッダといった、標準語よりも音的な融合が進んだ形で使用されることが多い。

- (1) 食ッテダ>食ッタ、走ッテダ>走ッタ (四段動詞)
- (2) 見デダ>見ッダ、開ゲデダ>開ゲッダ (一段動詞)
- (3) 来テダ>来ッタ (カ変動詞)
- (4) シテダ>シッタ (サ変動詞)

上の動詞の単純タ形はそれぞれ、クタ、ハシタ（促音が削除される）；ミダ、アゲダ；キタ；シタであり、促音がないことでティタ形と明確に区別される<sup>2)</sup>。なお、テイルの担うアスペクト的な意味は基本的に継続相と結果相であり、標準語と異なるところはいまのところ見出せていないが<sup>3)</sup>、テンス面で、ティタは過去のほかに、一時的な現在も表す点で標準語とは異なる。

(b) 前接形式の拡大／接語化の進行。一方、テイル・ティタは、(a) とは逆に、イル・イタもしくはテイル・ティタ全体で標準語よりも自立している側面も持ち、次のように、可変的、一時的な状態を表す形容詞述語文や名詞述語文のなかで、サ変動詞のサポートなしで使用される。

- (5) 太郎は最近忙しくテルようだ（忙しくしている）
- (6) あいつは大学を卒業してもフラフラテル（プラプラしている）
- (7) 太郎はまだ学生デル（学生だ、学生のままでいる）

テルは不変化詞ではなく、タ形（「テダ」）でも使用されることがある。

- (8) 太郎はそのころ、忙しくテダケなあ（ケは回想。渋谷 1999b 参照）
- (9) あいつはそのころ、職がなくてフラフラテダケなあ（同）
- (10) 太郎はそのころ、まだ学生デダケよ（学生だったよ。ケは報告。同）

「動詞テ形+（イ）ル」が「動詞連用形+テル」に再分析され、さらに動詞連用形以外にも後接するようになったものと考えられる。

### 3. 山形市方言の補助動詞の自立度（1）：形態統語的特徴

以下、3節と4節では、山形市方言の補助動詞が、標準語の場合よりも自立度が高い=文法化が進んでいないことを示す特徴をあげる。本節ではまず、その形態統語的な特徴を指摘する<sup>4)</sup>。ただしそれぞれの特徴は、以下の表1にあげるすべての補助動詞に該当するわけではないものもあるようである。補助動詞間の自立度の異同の解明については、今後の課題である。

① 「動詞テ形+補助動詞」の形態的融合。補助動詞の自立度、文法化の度合いを測るひとつの基準として、「動詞テ形+補助動詞」が融合して使用されるか否かということがある（岸本 2021、渋谷 2021 など）。標準語、山形市方言、東京方言、大阪方言の各「動詞テ形+補助動詞」の形式を示すと、表1のようになる（渋谷 2021 の表3を一部改変して引用）。ゴチック太字部が、

音の脱落や融合が起こっているところである。「一」は当該形式が当該方言では使用されないと示す。山形市方言では、標準語の「である」が担う意味に相当する意味は、次の例のように、「動詞自発形+テイル」が担う（渋谷 1989）。なお、以下の例のティタは、非恒常的／一時的な現在を表す（2節（a）参照）。

（11）机の上に、花瓶が {置いてある（標準語）／置ガッタ（<置グ+ -aru +ティタ）}

表1 各変種の「動詞テ形+補助動詞」の実現形

| 標準語   | 東京方言   | 大阪方言 | 山形市方言 |
|-------|--------|------|-------|
| ている   | テル     | テル   | テル    |
| ていた   | テタ     | テタ   | テダ    |
| (ておる) | 一      | トル   | 一     |
| ある    | テアル    | タール  | 一     |
| いく    | テク     | テク   | テング   |
| くる    | テクル    | テクル  | テクル   |
| てしまう  | チャウ    | テマウ  | テスマウ  |
| おく    | テオク・トク | トク   | テオグ   |
| みる    | テミル    | テミル  | テミル   |
| みせる   | テミセル   | テミセル | テミシェル |
| やる    | テヤル    | テヤル  | テヤル   |
| あげる   | テアゲル   | タゲル  | 一     |
| もらう   | テモラウ   | テモラウ | テモラウ  |
| くれる   | テクレル   | テクレル | テケル   |

表1からわかるように、山形市方言では、2節で見たテイルを除いて、テに続く補助動詞はその動詞が単独で使用される場合と同じ形式をとり、動詞テ形に後接することによって補助動詞の音の一部が脱落する、あるいはテと補助動詞が融合するといったことはない。

② 独立したアクセント単位。筆者の内省では、山形市方言では補助動詞は比較的独立して発音される。当該方言は無型アクセント方言であるので根拠としては弱いが、たとえば命令形の場合、「書いてみせろ」は、イントネーションとも関連して、「書イデミシェロ（○●●●●●）」（とくに上昇調の場合。当該方言では命令文は上昇イントネーションもとる）のほか、「書イデミシェロ（○●●○●○）」（とくに下降調の場合）のように、2つのアクセント単位で発音される事も多い（「○」は低く、「●」は高く発音されるモーラ）。

③ 助詞の介在。補助動詞の自立度を測るには、「テ」と補助動詞の間に助詞を介在させることができるとどうかがひとつの基準になりうる（三宅 2015、岸本 2021 など）。この点、山形市方言においてはそもそも取り立て助詞等の数が少なく（渋谷 2021）、しかも標準語などよりも音節／モーラ数が少ないために介在しやすいところがあり（以下は「なんか」に相当するナ、「ばかり」に相当するバリの例）、他の方言と単純に比較することはできないが、補助動詞によっては次のように助詞を介在させることができる。

- (12) おれはそこに行って {ナイネ／なんかいない} よ
- (13) あの人、まだ行って {ナスマワネベ／\*なんかしまわないだろう} ?
- (14) いちいち書いて {ナミネ／?なんかみない} よ
- (15) いちいち教えて {ナモラワネ／?なんかもらわない}
- (16) いつも魚を釣って {?バリオイデ／??ばかりおいて}、そのあとは食べようともしない
- (17) そのハムは3日前にあけたものだから、あさってまでなんかとて {ナオガンネ／?なんかおけない／はおけない} よ
- (18) いつもお菓子を見せて {バリケッケント／??ばかりくれるけど}、少しも食べさせてくれない

④ 補助動詞の脱範疇化（動詞らしさの消失）。標準語の補助動詞のなかには、（書記言語としてはともかく、口頭言語あるいは東京方言において）受身文で使用した場合に、不適格ではないものの、山形市方言の場合に比較してやや不自然に／言いにくくなるものがあるようである。

- (19) 家の前に一晩中車を {停メデオガッデ／?停めておかげで} 迷惑した。

標準語の場合、テオクの持つ動作主体の意図性（高橋 1976 の「もくろみ」性）と受身文の表す主語が被る被害の意味が述語内部で衝突するのに対して、山形市方言ではテオクのもくろみ性が弱く、置いた結果に焦点を置くために、問題なく言えるということかもしれない。

また、標準語では、補助動詞の一部にテイルがつくと、文法的に不適格とまでは言えないものの、やはり若干不自然に（言いにくく）なるケースがあるが、山形市方言ではとくに不自然にならずに使用されることが多い。このことも、山形市方言の補助動詞の自立性の高さを示すものと解釈できる。

- (20) A：冷蔵庫の古くなったチーズ、大丈夫だった？  
B：あ、いま {クテミッダ／?食べてみてる} ところだ
- (21) 君の分は別に {トッテオイッダ／?とっておいてる} から安心しろ
- (22) 時間があるならおまえの方で先に準備を {シテオイデケデル／??しておいてくれている} といいんだけど（テルは結果相）

なお、テクレル文の場合には、さらに、次の例のように、テイルが、テ形部の動詞と補助動詞の2カ所で使用される形式もごくふつうである（この場合のテケルは「てあげる」の意）<sup>5), 6)</sup>。

- (23) チャーハンを {ツクテデケッダ（作っていてくれていた）／??作っていてあげている} から食べなさい

#### 4. 山形市方言の補助動詞の自立度（2）：用法

次に、本節では、山形市方言の補助動詞のなかからテシマウ、テオク、テミル、テミセルの4つの補助動詞を取り上げて、用法面での抽象化の度合いを確認する。テイルについては2節に述べたように個別の特徴があり、テアルとテオルは当該方言では使用せず、移動方向に関わるティクとテクル、授受に関わるテクレル・テモラウ・テヤルについてはそれぞれをセットとして体系的に把握したうえで標準語と対照すべきところがあるので、ここでは除外する<sup>7)</sup>。

上の4つの補助動詞については、いずれも、たとえば以下のように、補助動詞が本動詞として使用されたときとる格とは異なった格をとることがあり、また本動詞として使用された場合よりも意味的に抽象化しているので、当該方言でも文法化は進行していると判断できる。

(24) あの人には会ッテオグ（会っておく）といい

(25) そのいすにスワテミロ（座ってみろ）<sup>8)</sup>

(26) あの本、まだ必要だったのか。ずっと前に隣の息子にケデ（ヤテ）スマタ（くれて（やつて）しまった）よ

しかし一方では、以下に見ていくように、標準語の補助動詞ほどには文法化が進んでいないことを示す用法面での事象も観察される。以下、テシマウ（4.1）、テオク（4.2）、テミル（4.3）、テミセル（4.4）の順に述べる。なお、以下の節の見出しには、読みやすさを考慮して対応する標準語形をあげる。また、以下の分析で使用する補助動詞の用法の分類枠については、基本的に、現代標準語や古典語の補助動詞について分析した先行研究のものを参照する<sup>9)</sup>。以下に示す表の例も先行研究のものであるが、それらに本文中で言及する場合、表の例文をそのまま方言に訳した場合に不自然になるものについては、一部改変したところがある。例文に付した「\*」は、山形市方言や標準語では当該形式は使用しない、もしくは当該形式を当該用法では用いないということを示す。

##### 4.1. テシマウ

まず、テシマウ（方言形はテスマウ）について、日本語記述文法研究会（2009）と、テシマウの文法化のあり方を通時的に分析した梁井（2009）で提示されたものを用法の分類枠として採用し、標準語と山形市方言の対応関係を示すと、表2のようになる。以下の表において、「○」は山形市方言でも同じ用法で使用されるもの、「△」は当該方言に適用される独自の条件のもとでその用法で使用されるもの、あるいは文としては成り立つが標準語とは意味が若干異なるものの、「\*」はその用法では用いないものを表す。

表2 テシマウ

| 用法              | 標準語<br>例   | 山形市<br>方言 |
|-----------------|--|-----------|
|                 |  | 意志的実現     |
| 1. 動きの完遂        | おかげが残っていたので、食べてしまった                                | ○         |
| 2. 最終局面の実現      | あっという間に、みんななくなってしまった<br>雨が降りそうだったので、思い切って傘を買ってしまった | △         |
| 無意志的実現          |  |           |
| 3. 無意識のうちの実現    | 友人に似た人に、つい声をかけてしまった<br>あんまりおいしいので、ラーメンを3杯も食べてしまった  | △         |
| 4. 予測に反する事態の実現  | こんな成績で日本代表に選ばれてしまうのは、心苦しい                          | △         |
| 5. 望まない事態の実現    | 急がなければ、バスが来てしまう（出現）<br>連休が終わってしまった（変化）             | ○         |
| a. 実現（限界動詞）     | 一日中歩きつづけたから疲れてしまった                                 | △         |
| b. 完遂（非限界動詞）    | 遊びに行くのはおやつを食べてしまってからにしなさい                          | △         |
| c.マイナスの感情・評価的意味 | ボールが飛んできて窓ガラスが割れてしまった                              | ○         |
| d. 無意志動作的意味     | よそうと思っているのに、お酒をみるとつい飲んでしまう                         | ○         |
| e. 望ましい事態       | トイレの中でキスされちゃった（小説例）                                | *         |
| f. 他者の様態・言動の揶揄  | こんな所で抱き合っちゃってよ（小説例）                                | *         |

(二重線の上は日本語記述文法研究会(2009)の分類、下は梁井(2009)の分類)

山形市方言のテシマウが表すのは、日本語記述文法研究会(2009)の用法分類にしたがえば、①望まない事態の実現(表2の5)と、②動きの完遂(表2の1)である。

### ① 望まない事態の実現

当該方言のテシマウは、標準語について近藤(2022)などが指摘するように、日本語記述文法研究会(2009)の分類にある意志的実現の場合も、無意志的実現の場合も、基本的に「話し手が望んでいない事態が不本意にも実現する」(近藤の「評価表示用法」といった意味を伴ことが多いようである。表2で日本語記述文法研究会(2009)があげる、「5. 望まない事態の実現」以外の他の用法についても、山形市方言では「その事態の実現は望ましいものではない」という意味が伴い(したがって表2では「△」とした)、この特徴を反映して、過去の望まない事態の実現を表す場合には、文末詞ハ(話し手の期待や予測とは異なる事態の実現を表す。渋谷1999a)が共起することも多い。

(27) A : あのお菓子、まだ残っている？

B : おまえが食べるんだったの？ きのうクテスマタハ (食ってしまったよ)

したがって、山形市方言では、日本語記述文法研究会(2007)の言う「ただ予想外であるということ」や、梁井(2009)の分類にある「e. 望ましい事態」や「f. 他者の様態・言動の揶揄」といった意味は表しにくい。

(28) ?たまたま試験を受けたら受ガテスマタ (受かってしまった。日本語記述文法研究会 2007: 46)

(29) a ??お酒を飲んでいるうちに、風邪が治テスマタ (治ってしまった。同 46、一部改)

b おまえがいつまでも風邪薬を買ってきてくれないから、いつの間にか風邪が治テスマタハ一

(28) や (29a) が山形市方言で言えるのは、試験に受かることが期待されていない／予想されていないのに、期待や予想に反して実現したような場合である (29b 参照)。近藤 (2022) が言う、事態としては望ましいが事態の実現性が低い (「驚くべきことに」などが共起する) 評価表示用法 (上の (28) や次の例) は、当該方言では不自然である。

(30) 後輩は今日のレースの一着を、すべて当ててしまっていた (近藤の (7b))

## ② 動きの完遂

一方、山形市方言のテシマウは、動きの完遂 (近藤 2022 では「終結点明示用法」) を表すこともある。この場合、近藤 (2022: 52) のあげる、終結点明示用法と解釈されやすくなる次の文脈条件がおおむね当てはまる。

### A. 評価表示用法とは解釈しがたいことを示す要素

A -1. 事態が望ましくないものではないことを示す要素

A -2. 事態の実現可能性が低いものではないことを示す要素

A -3. 話者が事態を制御できることを示す要素

### B. 終結点に達することを明示する意義があることを示す要素

B -1. 一定量の動きを行う期限

B -2. 行うべき動きの量

B -3. テシマウの付く動きの終結点で時間的前後が区切られる 2 つの動き

日本語記述文法研究会 (2007: 46-47、例は筆者) も、次のように「完遂を意味する副詞的成分が共起」する場合 (近藤の B-2) や、

(31) おまえ、まだ宿題やってるの？ 僕はもう最後までシテスマタ (してしまった) よ

(32) おまえがきのう残したお菓子、全部クテスマタ (食べてしまった) よ

従属節で使用される場合、

(33) 先に食器をカダヅゲデスマウ (片付けてしまう) から少し待ってくれない？

次のように命令や勧誘、勧奨、当為、願望等を表す行為策動的な文の場合 (上記 A-1、A-3 を満たす場合) 、

(34) しゃべっていないで、さっさとご飯をクテスマエ (食べてしまえ)

(35) この仕事だけさっさと終ワシテスマウベ (終わらしてしまおう)

- (36) 先に手紙を書イデスマタ（書いてしまった）ほうがいいんじゃない？  
 (37) この書類だけあしたまでに書イデスマワンナネ（書いてしまわなければならない）  
 (38) この宿題だけ先に終ワシテスマウダイ（終わらしてしまいたい）

などに、その事態の実現は望ましくないというニュアンスを伴わずに、動きを完遂することを表すとするが、このことは、上の例文で示したように、山形市方言のテシマウも同じである<sup>10)</sup>。

以上をまとめると、山形市方言のテシマウについては、標準語と同じく（あるいは、「その事態の実現は望ましいものではない」ということを表す範囲が広いという点では標準語以上に）文法化が進んでいるものの、梁井（2007）の「e. 望ましい事態」や「f. 他者の様態・言動の揶揄」といったところまでは表さないということになる。

## 4.2. テオク

山形市方言のテオク（方言形はテオグ）の担う用法は、日本語記述文法研究会（2009）の枠に一色（2016）の「非難」を加えた枠では次のようにある。

表3 テオク

| 用法          | 標準語<br>例  | 山形市<br>方言 |
|-------------|---|-----------|
|             |   |           |
| 結果の維持       | メモをドアに貼っておく<br>ベランダに洗濯物を干しておく<br>営業中ずっとラジオをつけておく<br>12時まで門を開けておく<br>小さい子どもを1人で遊ばせておくのは危険だ<br>好きなだけ言わせておこう | ○         |
| 事前の処置       | 先に材料をゆでておく<br>前の日にアイロンをかけておく<br>金曜日までに書いておきなさい<br>今のうちに洗濯をしておこう<br>破傷風の予防注射を打っておく                         | △         |
| 非難（一色 2016） | 弱小チームに負けておいて、全く反省しようとしている（一色 2016 の（5））   | *         |

### ① 結果の維持

山形市方言のテオクも、表3の「結果の維持」の用法を担う。

- (39) 大事なことなので、手帳に書イデオイダ（書いておいた）  
 (40) あしたは朝から出かけるから、きょうのうちに準備シテオグ（準備しておく）よ  
 (41) あの人はわざとこんなことをしたのではないと思テオグ（思っておく）ことにした  
 高橋（1976：134）の言う「対象にはたらきかけないで、そのままの状態を持続させる」用法などでも同じように山形市方言では使用できる。

(42) いくらやめろと言っても聞かないからもう勝手にサシェデオグ（させておく）んだ  
 ただし、3節で述べたように、当該方言と標準語のテオクには、取り立て助詞が介在できる  
 (しやすい) か否か、受身文で使用できるか否か等の面で若干の違いがあり、山形市方言のほう  
 がオクの自立度が高いようである。

## ② 事前の処置

一方、「事前の処置」についてはやや標準語と異なるところがある。

(43) じゃがいもは時間がかかるから、先にユデデオイダ（ゆでておいた）よ

(44) ユニフォーム、明日使うっていうから、もう洗濯シテオイダ（しておいた）よ。あ  
 した忘れずに持つていけ。

のような、行為の結果が主体や対象に目に見えるかたちで残る、「結果の維持」とも解釈できる例の場合、あるいは、結果が目に見えない場合にも、次のように、「事前の処置」を相手に指示する文や、「事前の処置」を行う話し手の意志を述べる文の場合には適格であるが、

(45) レースの本番まで、その辺で {走テオゲ（走っておけ）／走テオグ（走っておく）}

(46) 念のためインフルエンザの予防接種 {打ッテオグ（打っておく）といい／打ッテオ  
 グ（打っておく）ことにする}

以下のように、結果を目で確認できない事前の処置を行ったことを述べる文では、テオクは不自然になる<sup>11)</sup>。

(47) ?? 競技の前に、少し走テオイダ（走っておいた）

(48) ?? ここに来る前に、今日のスケジュールを見テオイダ（見ておいた）

## ③ 非難

一色（2016）の「非難」や、高橋（1976: 148）があげる「したにもかかわらず」の意味を表す次のようなテオクも、山形市方言では使用されない。

(49) ?? あれだけのことをシテオイデ（しておいて）、何もなかったように振る舞っている

## ④ 補足：「テイル」と「テオク」の競合

沖（1996: 36）は、京阪方言のテオクは、「『対象に変化を与えることをあらわさない他動詞および自動詞』が『～ておく』に上接した場合に、(中略) <その動作を始める状態に入り、その状態をある時間持続する>」というアスペクト機能を担うと指摘するが、山形市方言のテオクにはこのような用法はない。沖（1996: 34）は、このような場合、標準語（沖の用語では「共通語」）では多く「ている」を使用すると述べているが、山形市方言でも同じく「テイル」を使用する。

(50) さきに {カエテッカラナ（山形市）／かえっとくなー（京阪）／帰ってるよ（共通語）}

(沖の (20))

- (51) まだ時間あるから、映画でも {ミデッカ(山形市)／みとこか(京阪)／見てようか(共通語)} (沖の (24))

「テイル」を使用するという点では、山形市方言ではさらに、上の(43)(44)の「事前の処置」の例の場合にもタ形かティタ形(結果相)で述べるのがふつうであり、

- (52) じゃがいもは時間がかかるから、先に {ユデダ(ゆでた)／ユデッダ(ゆでている)} よ。

- (53) ユニフォーム、あした使うっていうから、もう {洗濯シタ／洗濯シッタ(洗濯している)} よ。あした忘れないで持つていけ。

また、テクレル(方言形はテケル)文において、標準語で「ておく」を使用する、対象に変化を与える他動詞の場合でも、「テオク」を使用せずに「テイル」を使用することがある(3節④参照)。

- (54) おまえの作り残したところ、代わりに作テデケル(作っていてくれる。標準語では「作つておいてあげる」)から安心しろ

- (55) その書類、{書イデデケダ(書いていてくれた。標準語では「書いておいてあげた」)／書イデデケッダ(書いていてくれていた)}から持つていきなさい

#### ⑤ まとめ

以上をまとめると、当該方言では標準語にくらべて全般的にテオクが担う用法の領域が狭く、現状では、オクの原義が残っている=行為を行った結果が対象等に残存する状況を描く場合を中心に使用されている、ということになる。

### 4.3. テミル

山形市方言のテミルの用法を日本語記述文法研究会(2009)の枠にそって整理すると、表4のようになる。

表4 テミル

| 用法        | 標準語                                    | 山形市方言 |
|-----------|--|-------|
| 例         |  |       |
| 試行        | 名前だけ知っていて味は知らなかつたけれど、食べてみた             | ○     |
| 事態出現への気づき | そう言われてみるとたしかにそのとおりだ<br>できあがってみないとわからない | △     |
| 条件表現相当    | あいつにそんなこと聞いてみろ、誤解されるぞ                  | △     |

当該方言のテミル(方言形も同形)は、以下のような試行の用法では一般的に使用される。

- (56) みんなうまいうまいって言うから、きのうクテミダ(食べてみた)

- (57) うまいから1回クテミロ(食べてみろ)

- (58) いろいろシテミダゲント（いろいろやってみたけれど）なかなか蓋があかない  
 条件節で使用された場合の、事態出現への気づきを表す用法（三宅 2017 の「発見構文」）も  
 担うが、何らかの制限があるようである（現時点では不明）。
- (59) ヤッデミッド（言われてみると）たしかにそうだな
- (60) ?理由がワガテミッド（わかってみると）、たいした問題ではない
- (61) \*気ヅイデミダラ（気づいてみたら）、私はまだ酔っていなかった（三宅 2017 の（27）  
 を一部改変）
- (62) \*その会は、終ワテミッド（終わってみると）、盛会だった（三宅 2017 の（31b）  
 次のような、条件表現相当の、行為を指示する用法は、(63) や (64) のような、行為を実行することを前提としてその行為の結果を述べる文などでは成り立つが、行為の実行を事前に阻止しようとする (65) や (66) の場合は容認されない。
- (63) 1度クテミロ（食べて見ろ。上昇調で）、おいしさがきっとわかるよ（日本語記述文  
 法研究会 2009: 139）
- (64) そんなに東京に行きたいのなら行ッテミロ（上昇調で）。たぶんあとで困ると思うよ。
- (65) \*そんなところに行ッテミロ。絶対にゆるさないぞ
- (66) \*あいつにそんなこと聞イデミロ。誤解されるぞ

#### 4.4. テミセル

テミセル（方言形はテミシェル）の用法について、高橋（1976）や笠松（1991）を承けた青木（2021）の枠を一部改変して参照枠とすると、表5のようになる。表中の例も、上記先行研究のものを一部改変したものである。

表5 テミセル（青木 2021 の表1を一部改変）

| 用法 |      | 主語<br>人称 | 二格   | 動詞  | 時制 | 例                              | 山形市<br>方言 |
|----|------|----------|------|-----|----|--------------------------------|-----------|
| 手本 | 手本   | 自由       | とる   | 意志的 | 自由 | 先生は生徒の前で歌ってみせた                 | ○         |
|    | 見せかけ |          |      |     |    | 彼は私を見て笑ってみせた                   | *         |
|    | 信号   |          |      |     |    | 市川はうなずいてみせた<br>(笠松 1991 の (3)) | *         |
| 決意 |      | 一人称      | とらない | 意志的 | 未来 | 明日は必ず勝ってみせる                    | ○         |
| 評価 |      | 二人称      | とらない | 達成的 | 過去 | 期待に応えてみせた                      | *         |

まず、「手本」用法については、山形市方言と標準語とで大きな違いはない。

- (67) 1回シテミシェッカラ（してみせるから）よく見ていろ

- (68) あの漢文の先生、今日の授業で、漢詩を中国語で読ンデミシェダケ（読んでみせた。ケは報告）

「手本」を示すことは基本的に恩恵の授受になるため、授受表現と共に起することも多い。

- (69) 1回シテミシェデケッカラ（してみせてあげるから）、そのあと一人でやってみろ

- (70) 1回シテミシェデモラタ（してみせてもらった）けれど、よくわからない

「決意」用法については、当該方言では、

- (71) ?? よし、絶対優勝シテミシェル！

のように言い切りのかたちでは用いにくいものの、文末詞や接続助詞を後接させた場合には自然になる<sup>12)</sup>。

- (72) よし、絶対 {優勝シテミシェツヅ／優勝シテミシェツカラナ}

一方、表5の「評価」「見せかけ」「信号」、あるいは井上（2020）が取り上げた、「てみせた。」の形で「見事さ」「わざとらしさ」等を表すような用法（身振り・態度、作り様態、結果）は、井上が副題に「書き言葉の『てみせた。』」と記すのと同様に、口頭言語である当該方言では使用されることがない。

- (73) \* 彼は首を振ッテミシェダ（井上 2020 の表3の「身振り・態度」の例を一部改変）

- (74) \* 茂は、こう言って笑テミシェダ（笑ってみせた。井上 2020 の (24)、「作り様態」）

- (75) \* 彼は試験に合格シテミシェダ（井上 2020 の表3の「結果」の例）

以上をまとめると、テミセルについても、標準語にくらべ、山形市方言では用法の拡張がそれほど進んでいないということができる。

#### 4.5. 山形市方言のその他の補助動詞がない用法

以上見てきたように、先行研究において、モーダル化あるいは主観化した用法、比較的新しい用法、文法化や構文化が進行した段階にある用法などと指摘されている用法は、山形市方言の補助動詞にはないことが多い。その他、本稿では分析の対象から除いたが、次のようなテモラウ、テクレルの拡張的な用法も、山形市方言の補助動詞においては使用できる条件がまだ限られているようである。

- (76) a ?? この大事なときにそんなことをシテモラタラ（してもらったら）困る

- b そんなことをシテモラタラ氣の毒でお宅に行くとき手ぶらでは行けなくなる

- (77) a \* ようやく涼しくナテケダ（なってくれた）（益岡 2013: 28 の (12)）

- b ? 今年はなかなか涼しくナテケネクテ（なってくれなくって）なあ

- c おまえ、いったいなにをシテケダノヤ（してくれたんだよ（非難）。ヤは WH 疑問文で使用される文末詞）

詳細は今後の課題である。

## 5.まとめと今後の課題

本稿では、山形市方言の補助動詞について、標準語と対照しつつ、音融合・アクセント・助詞の介在・脱範疇化などを基準とする形態統語面（3節）、及び、各「動詞テ形+補助動詞」の担う用法の面（4節）から整理を行い、当該方言の補助動詞は全体として標準語ほどには文法化が進んでおらず、自立度が高いことを確認した。このことと関連して、当該方言にはさらに、

- ・終止連体形が使用される表現が多い（可能の「行ク+イ（<行クニイイ）」など）
- ・標準語の連用形接続形式が終止形接続形式に変化している部分がある（願望の「行グ+ダイ」）

といった事象も観察される。これらを含めて当該方言の述語の形態統語的な特徴をまとめれば、

- ・複雑述語を構成する個々の要素は比較的自立しているが、
- ・テイル形などには複雑な形態音韻規則がかぶさり、結果的に融合的な述語の形態を示すところがある

といったところに集約できるように思われる（渋谷 2021）。

関連して、本稿冒頭において、当該方言は「動詞連用形+動詞」の形を持たないと述べたが、当該方言には、カチャバグ（ひっかく）、ヒパダグ（たたく）、フチュブス（つぶす）のような、もともと複合動詞（影山 2013 の「主題関係複合動詞」）だったものが、前項動詞が接辞化したと思われる語はある。また、青木（2020）は、古代語から現代語にかけての「～おく」と「～ておく」、「～みる」と「～てみる」などの「2種の『補助動詞』」を分析して<sup>13)</sup>、（いま、当該文献の構造面についての議論は省くとして）「動詞連用形+動詞」から「動詞連用形+テ+動詞」へと、共存また移行するプロセスを描き出しているが<sup>14)</sup>、このプロセスが過去の山形市方言にも当てはまるすれば、山形市方言はもともと「動詞連用形+動詞」の形を持っていたが、現在に至るまでに、影山（2013）などの言う語彙的（主題関係・アスペクト）・統語的等のタイプの違いにかかわらず、形態統語的に複雑な、動詞が連鎖する構造（複合動詞）をほぼすべてなくし、シンプルなシステムを作り上げたということが推測される。

以上のような推測は妥当であるのか否か、妥当であるとすればこのことと、本稿で確認した山形市方言の補助動詞における文法化の遅れや複雑述語の構成要素の自立度の高さは、山形市方言のような「周辺部の、小さな、閉じた社会的ネットワークのなかで使用される言語や方言は形態統語的に複雑な様相を呈する」という社会言語類型論の主張の反例になるのか否か、個々

の補助動詞について詳細に記述を行うこと、補助動詞間の自立度の異なりを解明すること、さらには当該方言で複合動詞を代替する表現装置は何かを整理することなどとあわせて、今後の課題としたい。

### 注

- 1) 本稿では「標準語」という用語を、「共通語」と区別せず、話すことばか書きことばかといった違いも考慮に入れずに、地域的な情報が焼き付いていないことばといったゆるい意味で使用する。
- 2) ただし、終止形2音節の四段動詞のタ形は基本的に促音を維持し、ティタ形は買ッテダ、切ッテダのようになる。クウ（食う）、ナル（成る）などは例外的に促音が削除される。形態音韻規則の詳細は渋谷（2008）。
- 3) 以下の4.2節でテオクについて見るように、そのほかに、テイル文の使用頻度なども標準語と当該方言とで異なる可能性がある。
- 4) 補助動詞の特徴については三宅（2015）など参照。
- 5) その他、当該方言のクレル（方言形ケル）には、単独で使用される場合を含めて可能形式を持つといった特徴もある。
  - (a) 悪いけど、この本は君にはケランネ (\*くれられない／あげられない)
  - (b) 悪いけどあした東京に行ッテケランネガ (\*行ってくれられないか／行ってもらえないか)
- 6) 補助動詞の脱範疇化については、その他、岸本（2021）が、上の①で述べた融合に加えて、次の2つを判断の基準としている：(a) 動詞句分裂文の焦点位置に現れるか否か。脱範疇化が起こっていない「おく」については「学生がしたのは〔あの本を読んでおく〕ことだ」「学生がしておいたのは〔あの本を読む〕ことだ」(岸本の(7b,7c))の両者が可能であるが、脱範疇化している「いる」については「\*学生がするのは〔あの本を読んでいる〕ことだ」(岸本の(12b))が不適格になる。(b) 可能接辞が付加できるか否か。脱動詞化が起こっていない「おく」については「すぐ宿題をやっておける」(岸本の(18b)を一部改変)のように可能接辞が付加できるが、脱範疇化している非融合形の「いる」については、「あの選手はいつまでも {?\*走っていられる／走ってられる}」(岸本の(42a,b)を一部改変。文法性判断は岸本による)のように可能接辞が付加できない。以上の2つの判断基準については、山形市方言では、岸本が採用したような(a) 動詞句分裂文は使用されることなく、また(b) 可能接辞付加についても、当該方言の可能肯定文は可能動詞や助動詞(ラ)レルではなく接辞-i(否定文は助動詞ラレル)が担う(「あの子供はいつまでもひとりで遊んデ(イ)ルイ」などの潜在可能文は適格)、また、岸本が多くあげる、動作の実現までを含んで述べる実現可能文(「お客様は料理をすぐに食べてしまえた」(岸本の(18a)を一部改変)は山形市方言の可能文では回想を表すヶを使用して「クテスマウイケ」のように言わないと表せないといったことがあり、脱範疇化を確認する基準としては使いにくい。
- 7) 当該方言の授受に関わる補助動詞について簡略にまとめると、以下のようである。テアゲルは使用せず、遠心方向・求心方向ともにテクレルが使用される。テヤルは方向性のみをあらわし(「息子が大阪から書類を送テヨゴシタ(てよこした)から、すぐに書いて送テヤタ」)、授受表現とは言えない。
- 8) 当該方言の命令形は標準語のような強い行為指示は表さず、文末詞ナ(嘆願)、ネ(確認)などとも共起する。上昇イントネーションをとることは3節で述べた。詳細は渋谷(2003)参照。
- 9) したがって、現代標準語や古典語にはない、山形市方言の補助動詞に特徴的な用法は除かれることになるが、以下の4形式についてはそのような用法はいまのところ見つかっていない。

- 10) 山形市方言については、近藤が「評価表示用法」と「終結点明示用法」を区別する根拠としてあげる、使役文テストとテモラウ文テストは使用できるが、尊敬形式「お～になる」テスト（当該方言では素材敬語はほとんど使用されない）と可能文テスト（当該方言には「書けてしまった」のような実現したことを含んで表す可能形式がない。注4参照）は使用できない。
- 11) このことに関する森山(2017)に、「知る」「出会う」などの偶然依存事態を表す無意志動詞の場合について、「ておいた」が不適格であり「ておこう」が適格になる場合をめぐる議論がある。
- 12) 補助動詞の自立性とは別の問題であろう。
- 13) 青木(2020: 222)は、「現代語のテ形に後接した『いる』などを『補助動詞』と呼ぶのであれば、古代語の連用形に後接した（機能語的に振る舞う）『渡る』『初む』などを『補助動詞』と呼ぶことは、まったく差し支えないだろう」とする（括弧内は渋谷が当該文献の他の箇所から引用して補記）。
- 14) ただし青木(2020: 220)は、小島(2001)を検討しつつ、「古代語に『複合動詞』の後項として補助的な用法がある」とこと、その語形が将来テ形後接型の形式を発達させることは、直接的な関係は無いと見た方がよいだろう」（圈点省略）としている。

## 参考文献

- 青木博史(2020)「『動詞連用形+動詞』から『動詞連用形+テ+動詞』へ—『補助動詞』の歴史・再考—」『日本語文法史研究』5: 197-226、ひつじ書房。
- 青木博史(2021)「『て+みせる』の文法化」天野みどり・早瀬尚子編『構文と主観性』くろしお出版、pp. 203-220.
- 一色舞子(2016)「『-おく』の歴史的変遷—韓国語『-twuta』との対照を視野に入れて—」『日本語文法史研究』3: 213-240、ひつじ書房。
- 井上直美(2020)「『彼は笑ってみせた。』は何を見せたか—書き言葉の『てみせた。』の意味機能に注目して—」『日本語の研究』16-1: 68-83、日本語学会。
- 沖裕子(1996)「アスペクト形式『しかける・しておく』の意味の東西差—気づかれにくい方言について—」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点 上巻』明治書院、pp. 30-46.
- 影山太郎(2013)「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—」影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』ひつじ書房、pp. 3-46.
- 笠松郁子(1991)「『してみせる』を述語にする文」『教育国語』100: 38-51、むぎ書房。
- 岸本秀樹(2021)「補助動詞構文におけるV2の文法化」岸本秀樹編『レキシコン研究の現代的課題』くろしお出版、pp.135-160.
- 小島聰子(2001)「平安時代の複合動詞」『日本語学』20-9: 71-78、明治書院。
- 近藤優美子(2022)「補助動詞“しまう”的用法と意味構造」『阪大日本語研究』9: 47-64、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座。
- 渋谷勝己(1989)「自発のテイル形—山形市方言を例にして—」吉澤典男教授追悼論文集編集委員会『吉澤典男教授追悼論文集』東京外国語大学音声学研究室、pp.229-239.
- 渋谷勝己(1999a)「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1: 6-15、大阪大学文学部社会言語学研究室。
- 渋谷勝己(1999b)「文末詞『ケ』—三つの体系における対照研究—」『近代語研究第十集』武蔵野書院、pp.205-230.

- 渋谷勝己 (2003) 「山形市方言における命令形後接の文末詞ナ・ネ・ヨ」『阪大社会言語学研究ノート』5: 114-27、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室。
- 渋谷勝己 (2008) 「新たなことばが生まれる場」金水敏・乾善彦・渋谷勝己『シリーズ日本語史 4 日本語史のインターフェース』岩波書店、pp.101-137.
- 渋谷勝己 (2021) 「山形市方言における動詞述語の分析性と統合性」『待兼山論叢 文化動態論篇』55: 1-19、大阪大学大学院人文学研究科。
- 渋谷勝己 (2022) 「言語の複雑性研究の現状」『阪大社会言語学研究ノート』18: 119-144、大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻社会言語学研究室。
- 高田祥司 (1999) 「大阪方言におけるテオク形の用法 —東京方言との対照を中心に—」『現代日本語研究』6: 51-77、大阪大学文学部日本語学講座。
- 高橋太郎 (1976) 「すがたともくろみ」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、pp.117-148.
- 日本語記述文法研究会編 (2007) 『現代日本語文法 3 第5部 アスペクト・第6部 テンス・第7部 肯否』くろしお出版。
- 三宅知宏 (2015) 「日本語の『補助動詞』について」『鶴見日本文学』19: 1-20、鶴見大学。
- 三宅知宏 (2017) 「日本語の発見構文」天野みどり・早瀬尚子編『構文の意味と広がり』くろしお出版、pp.65-78.
- 益岡隆志 (2013) 『日本語構文意味論』くろしお出版。
- 森山卓郎 (2017) 「意志性の諸相と『ておく』『てみる』」森山卓郎・三宅知宏編『語彙論的統語論の新展開』くろしお出版、pp. 136-150.
- 梁井久江 (2009) 「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5-1: 15-29、日本語学会。

(人文学研究科教授)